



宮崎大学学術情報リポジトリ

University of Miyazaki Academic Repository

中学校における集団生活の充実に向けた学級経営の事例研究：

Q-Uの実施と生徒主体によるアンケートの取組を通して

メタデータ	言語: ja 出版者: 宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センター 公開日: 2020-06-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 片山, 弘喜, 押田, 貴久, Oshida, Takahisa メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/5387

中学校における集団生活の充実に向けた学級経営の事例研究 ～Q-Uの実施と生徒主体によるアンケートの取組を通して～

片山弘喜*・押田貴久†

**The Casestudy of Class Management for Enhancement of group living
in Junior High School
- Through the use of Q-U and the questionnaire by the student -**

Hiroki KATAYAMA, Takahisa OSHIDA

I. はじめに

本研究の目的は、中学校において生徒の学級生活を充実させるために必要な学級担任の働きかけを学級集団のアセスメントツールであるQ-Uの実施と生徒主体によるアンケートの取組をもとに検討するものである。

一人の教師がすべての教科を教える学級担任制の小学校に比べると、教科担任制である中学校では学級担任が学級の生徒に関わる機会は担当する授業を除き、朝の会や帰りの会、給食の時間と決して多くはない。しかし、生徒にとって学級は学校生活における準拠集団となる。日本の学級集団は共同体の特性を有し、同時に学習集団としての機能体の役割ももっている（河村 2010、p.14）。学級における生徒の集団生活を充実させるためには学級担任による働きかけが重要となる。

先行研究では学級担任に必要な資質や力量が様々に検討されている。例えば、公立中学校の教師であった鹿島真弓は「集団を育てる教師の力量」として次の5つを挙げる（河村ほか2008、pp.38-39）。

1. 学級の現在地を見極め目的地を設定できる力
2. 目的地を具体的にイメージする力
3. 目的地までのストーリーラインを考える力
4. 生徒が教師の言葉をどのように受け止めているのか、仮説を立てられる力
5. 中学生を発達の視点で理解する力

また、河村茂雄は「集団のリーダーとして教師が発揮すべきリーダーシップ」として次の5点を示している（河村ほか2004、p.45）。

* 延岡市立土々呂中学校

† 宮崎大学大学院教育学研究科

1. 集団の目標を具体的に設定し、明確化すること
2. 集団の目標を達成するための具体的な方法を示すこと
3. 集団の目標の達成に向けて成員を動機づけること
4. 成員間相互の好ましい人間関係を形成し、集団としてまとめること
5. 集団内外の資源を有効に活用すること

つまり、学級担任は学級集団の現状から目標を定め、その目標の達成に向けた具体的な方法や筋道を示し、生徒たちに働きかけていくことがポイントとなる。

学級集団の状態や学級経営の評価は数値で表しにくい。例えば、教科指導においては試験や学力検査が定期的に行われている。その結果を分析することで、指導が十分に行えていたかを把握することができる。一方で、学級経営においては定期試験のようなものを行うことなく、教師の主観的な観察や学期末の生徒の反省をもとに状況を判断することがある。こうした中、学校教育の課題であるいじめや不登校を早期に発見したり、未然防止したりするためのツールとして、「Q-U（楽しい学校生活を送るためのアンケート）」や学校環境適応感尺度「アセス」などの心理検査が開発されている。これらは学級全体の傾向を理解できるだけでなく、個々の生徒の状況も知ることができる。また、1年間に数回実施することで、その変容を学級における指導の改善に活かすことができる。

宮崎県内でもこうしたアセスメントツールを活用した学級づくりを取り組んでいる自治体や学校がある。宮崎大学教職大学院では、学級経営に関する授業でQ-Uを紹介し、県内の学校と連携し、Q-Uを活用した学級経営に関する研究を進めている。本事例研究もその流れの一つに位置付くものである。

学級は学級担任による働きかけのみで形成されるものではなく、生徒との相互作用、生徒間の相互作用も大きく影響する。生徒を学級経営に参画させる取組として「学級力向上プロジェクト」がある(田中 2013)。これは、「学び合う仲間としての学級をよりよくするために、子どもたちが常に支え合って目標にチャレンジし、友達との豊かな対話を創造して規律を守り安心できる環境のもとで協調的な関係を作り出そうとする力」(田中 2013, p.4)である学級力を、「達成力」や「自律力」などの6つの領域からなる「学級力アンケート」を活用し、「学級力レーダーチャート」により可視化するものである。さらに、これを繰り返し行うことで、R-PDCAサイクルによる「学級力プロジェクト」としている。本事例研究でも「学級力向上プロジェクト」を参照にし、学級担任の指導のもと、できる限り生徒主体による学級目標の設定を行い、生徒主体で行うアンケートを通じた集団生活の充実に取り組んでいる。

そこで本稿では、アセスメントツールであるQ-Uと生徒主体によるアンケートなどの実践的取組を通して、中学校における集団生活の充実に向けた学級経営の在り方を検討していく。

Ⅱ. 対象学級とQ-Uの結果

1 対象学級の概要

事例となる学級は、A市立X中学校の3年Y組である。学級の生徒数は35名（男子19名、女子16名）となっている。学年の構成は5学級であり、1年次は6学級、2年次は5学級で編成されていた。

学級担任は、教職経験12年目であり、X中学校勤務5年目のB教諭である。なお、B教諭は、学級担任として持ち上がってはいない。

2 Q-Uにおける結果の推移

(1) 「いごちのよいクラスにするためのアンケート」の結果

「いごちのよいクラスにするためのアンケート」は、承認得点と被害得点を学級満足度尺度としている。事例学級における結果は図1の通りであった。

第1回目（5月）		第2回目（10月）		第3回目（12月）	
侵害行為認知群	満足群	侵害行為認知群	満足群	侵害行為認知群	満足群
11%	29%	6%	55%	12%	53%
学級生活不満足群	非承認群	学級生活不満足群	非承認群	学級生活不満足群	非承認群
29%	31%	15%	24%	12%	24%

図1 学級満足度尺度の結果

この結果から、学級の状態は、混沌とした状態から満足群と非承認群の多い状態である「管理型」学級に変容していると言える。学級生活不満足群が減少して、同時に満足群も増加していることから、学級全体の状態は良くなりつつあることもわかる。一方で、侵害行為認知群は2回目では減少しているものの、1回目と3回目では数値がほぼ変わらない。また、非承認群は2回目以降の変化が見られない。

(2) 「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート」の結果

「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート」では、生徒の平均点をグラフ化した「学級生活意欲プロフィール」で学級全体の傾向を把握することができる。また、各生徒の合計点を「学校生活意欲総合点」とした分布図で、それぞれの生徒の位置を理解することができる。事例学級における学級生活意欲プロフィールの推移は図2、学校生活意欲総合点の分布の変化は図3である。

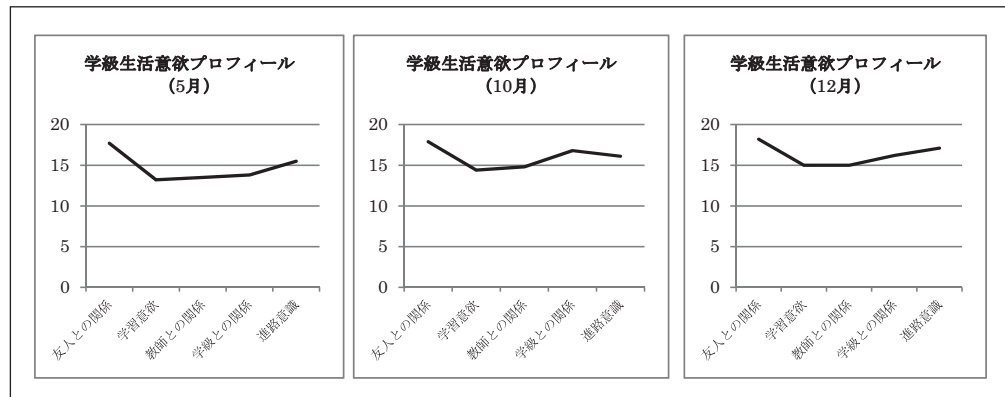


図2 学級生活意欲プロフィールの結果

学級生活意欲プロフィールにおいては、すべてにおいて数値が上昇している。総合点は1回目が73.7であったのに対し、3回目は80.8と大きく改善している（全国平均は75.4）。また、進路意識の領域については、3回目の結果では平均的な得点の範囲として示されている数値を上回った。

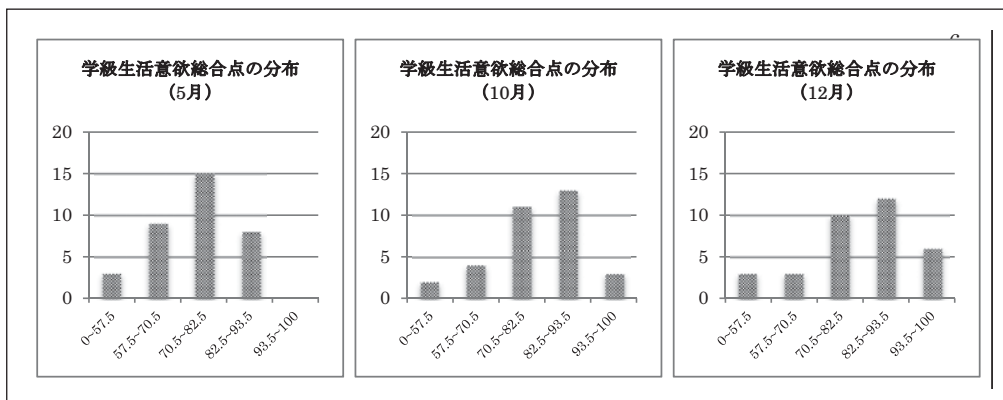


図3 学級生活意欲総合点の結果

学級生活意欲総合点の分布にも変化が見られる。分布は全体的に上位に移行しており、学級での生活に意欲を持っている生徒が多くなっている。一方で、最下位に位置する生徒は変わらず、全ての生徒が満足しているわけではないことが理解できる。

Q-Uにおける結果の推移は、前述のとおりである。結果を総括すると学級はよりよい状態に移行していると考えられる。では、どのような実践からそのような変化が見られるのか。事例学級における実践をまとめると、特徴となる事例は次の4つである。

- ・ 学級目標の設定
- ・ 学級における班活動などの管理
- ・ 学級生活振り返りアンケート
- ・ 道徳指導の重視

これらの実践について、それぞれを整理する。

Ⅲ. 学級担任の実践

1 学級目標の設定

通常、年度が始まった4月の学級活動では、学級目標を設定することが多い。その際、学級の生徒全員に対して意見を求めるものの、時間をかけることができずに目標が決定されることも少なくない。そこで、学級目標設定においてワークショップを取り入れ、できるだけ多くの生徒の意見を目標に取り入れた後に、時間をかけて目標を検討させた。学級目標設定の流れは表1の通りである。

表1 学級目標設定の流れ

月日	活動時間	関与する生徒	活動内容
4月10日（木）	授業：学級活動	学級の生徒全員	ワークショップによる課題の整理
	昼休み	学級役員の生徒	班で出された意見の集約
4月22日（火）	昼休み		「卒業時の学級の姿」をイメージした目標の具体化
4月30日（水）	昼休み		学級目標（仮）の設定
5月1日（木）	授業：学級活動	学級の生徒全員	学級役員による学級目標（仮）の提案と生徒全員による承認

ア 学級目標設定のためのワークショップによる授業

学級開きの直後に、その後の1年間を見通して学級全体の目標を考えることは生徒にとっては困難な作業である。特に第3学年の生徒にとっては、抽象的な学級目標になることもある。そこで、まず、中学校における学校生活を振り返り、個人の目標や理想などを明確にさせた。それを集約することで具体的な学級目標の設定に反映させた。

4月は新しい学級になり間もないことから、人間関係を築くきっかけが必要である。そのため、アイスブレイキングの機会も兼ねて、ワークショップ形式で授業を行った。授業は教師の指示で進めた。授業の流れは次の通りである。

- ① 個人で、A：なりたい自分、B：自分の改善点、C：自分の現在の目標の3つをできるだけ具体的に考え、A～Cに色分けされた付箋紙に書く
- ② 班でA～Cの付箋紙を出しあい、類似するものをまとめる
- ③ 他の班のまとめを見て、多くの意見を知る
- ④ 班の代表者が発表して、全体で意見を共有する

イ 学級役員による学級目標の検討

学級役員は学級委員長、学級副委員長及び書記の役職の生徒で構成され、学級のリーダーとしての行動が求められる。この生徒に学級目標を意識させ、それを達成するためのファシリテーターとさせるために、ワークショップで用いた資料をもとに学級目標を検討させた。検討にあたっては次の①～③の流れで助言と指導を行った。

- ① ワークショップの授業で、班によりまとめられた意見を再度確認し、類似するものにまとめる
- ② 「なりたい自分」のまとめから、「卒業時の学級の姿」をイメージさせる
- ③ 「自分の改善点」と「自分の現在の目標」から学級目標（仮）を考えさせる

以上の活動から、「卒業時の学級の姿」は次の3点にまとめられた。

- 離れたくないと思えるクラス
- まとまりのあるクラス
- 互いに高め合える、注意し合えるクラス

また、このイメージをもとに仮の学級目標を設定した。これを学級活動の授業に学級役員が生徒に提案した。学級の生徒全員に学級目標として承認されたものは次の3つである。

- 互いに高め合い注意し合える学級
- 全員出席の元気な学級
- 凡事徹底のできる学級

2 学級における班活動などの管理

日々の学校生活においては当番活動が重要となる。そこで、6人による班での週直活動を基本とし、それを給食当番とリンクさせた。また、6週に1回の班編成と座席替えを行った。図式化すると図4の通りである。

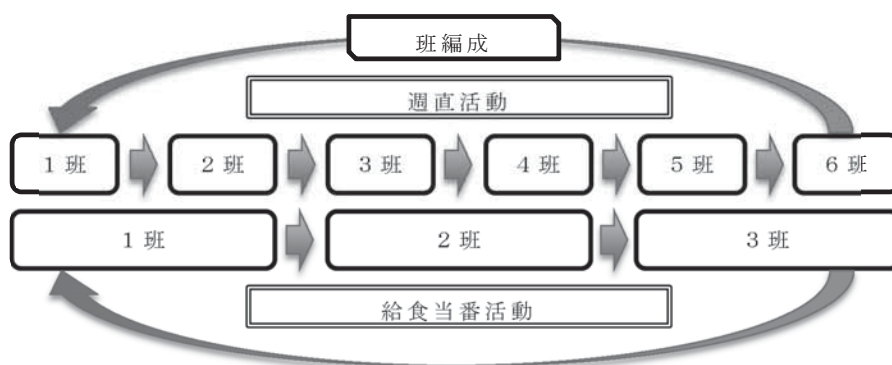


図4 当番活動の流れ

(3) 学級生活振り返りアンケートの実施と結果の活用

ア 学級目標に基づいた「学級生活振り返りアンケート」の実施

学級目標の具現化に向けて、学級役員で作成した「学級生活振り返りアンケート」を定期的に実施した。このアンケートは生徒が学級目標をもとに、学校におけるきまりなども参考にして5月に作成した。アンケート調査は6週に1回、前述の班編成のシステムと連動して行った。週直活動と給食当番活動が一巡した段階での調査となるため、学級全体の課題の把握だけではなく、生徒個人が学級での生活を反省する機会にもなる。

アンケートの質問数は当初は25問であった。回数を経るごとに質問を追加したり、学校行事の振り返りとなる質問を加えたりして、12月には37問となった。アンケートはマークシートを利用し、教師が専用のソフトウェアによる集計を行った。集計結果はプリントアウトしたものを学級役員の生徒に渡した。

イ アンケート結果の活用

「学級生活振り返りアンケート」は質問数が多いため、全ての結果を学級の生徒全員で共有することは難しい。そこで、肯定回答の割合が高い質問と低い質問をそれぞれ5つ抜き出して提示させることとした。学級委員長に掲示物を作成するように指示し、それを教室前の廊下に掲示させた。また、学級委員長が自主的に結果に応じて朝の会や帰りの会で改善を呼びかけたり、学級役員が学級における専門委員会に働きかけて改善を促したりしてアンケート結果を活用していた。

3 道徳授業の実践

学級担任が学級の生徒に関わることのできる時間は、朝の会や帰りの会、教科の授業、道徳、学級活動、総合的な学習の時間である。その中でも、道徳の時間を充実させることで、生徒自身のことを深く考えさせ、よりよい生活を送ろうとする態度を身に付けさせようと考えた。平成26年度に配布された資料である「私たちの道徳」は従来の読み物ばかりではなく、人物の紹介や自分自身の振り返り、名言など様々な角度から生徒の道徳性を高めることができる教材となっている。そのため、年間指導計画も考慮しつつ「私たちの道徳」を活用した道徳の授業を行った。実施日と項目については表2の通りである。

表2 道徳授業の実施日と項目

実施日	項目
5月14日（水）	調和のある生活を送る
5月21日（水）	目標を目指しやり抜く強い意志を
5月28日（水）	（教育実習生による授業）
6月11日（水）	（教育実習生による研究授業）
6月18日（水）	自分で考え実行し責任をもつ
6月25日（水）	真理・真実・理想を求め人生を切り拓く
6月30日（月）	自分を見つめ個性を伸ばす
9月17日（水）	温かい人間愛の精神と思いやりの心を
9月24日（水）	励まし合い高め合える生涯の友を
10月1日（水）	異性を理解し尊重して
10月8日（水）	認め合い学び合う心を
10月15日（水）	人々の善意や支えに応えたい
10月27日（月）	かけがえのない自他の生命を尊重して
11月17日（月）	美しいものへの感動と畏敬の念を
12月8日（月）	人権学習：「ひまわり」
12月22日（月）	人間の強さや気高さを信じ生きる

Ⅳ. 結果と考察

1 「学級生活振り返りアンケート」の結果

学級役員の生徒が行った「学級生活振り返りアンケート」における結果から特徴的なものを抜き出し、学級の変容を検討する。なお、結果は肯定的な回答の割合を用いる。

(1) 改善が見られる回答

ア 他者との関わりに係るもの

図5は、他者との関わりにかかるもののうち、改善の傾向が見られる回答の推移である。このグラフから、質問「人の悪口を言いませんでしたか」に肯定的な回答をした生徒は約50%か

ら約90%に増加している。特に9月以降の数値の伸びが著しい。2学期には体育大会や文化祭などの主要な学校行事があり、その活動を通じて生徒同士の人間関係が改善されているものと考えられる。また、多くの部活動では夏休みまでに3年生の活動を終えるため、学級での人間関係のつながりが強くなっているとも捉えられる。

質問「係活動をしっかり行いましたか。」への肯定的回答は全体的に高い。学級での生活に大きく貢献できる係活動に対する生徒の意識の高さが読み取れる。12月に数値が下がっているのは、進路決定の時期が近づき、学級への貢献よりも自分自身のことを重視して考えるようになっているからであると捉えられる。質問「授業中、私語をしませんでしたか。」への肯定的回答が上昇していることから分かるように、授業への取組を重視し、高校入試への準備をしたいという意識の表れであるとも考えられる。

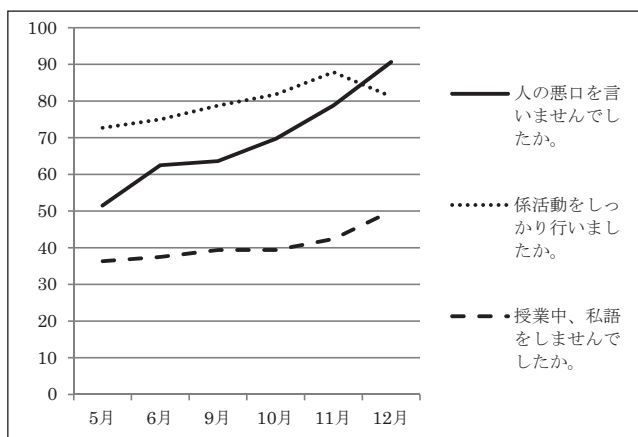


図5 他者との関わりに係る回答

イ 生徒自身の生活に関するもの

図6は、生徒自身の生活に関する回答の推移である。

質問「容儀検査に合格しましたか。」への肯定的回答は5月時点で50%以下であったものが6月以降は90%前後で推移している。事例校では月に1回程度の教師主導による容儀検査を実施している。教師による定期的な確認により、生徒にきまりを守ることを定着させることができていると考えられる。また、第3学年は受験生であるため、生徒が高校入試への意識を高めているとも捉えられる。

事例校では、授業開始2分前には自分の座席に着き、授業開始の合図と同時に黙想をすることを実践している。質問「2分前着席をきちんとしてできましたか。」の結果は上昇している。学校でのきまりを守ろうとする意識が次第に高まっていることが読み取れる。また、質問「無言清掃ができましたか。」への回答も10月から11月にかけて高くなっている。この時期には、清掃担当場所の変更がなされる。さらに、「清掃オリエンテーション」が実施され、清掃場所の確認だけでなく、清掃の方法についても再度説明がなされる。このような年度途中での活動の変化が、生活を改善しようとする意識の改善に影響していると考えられる。

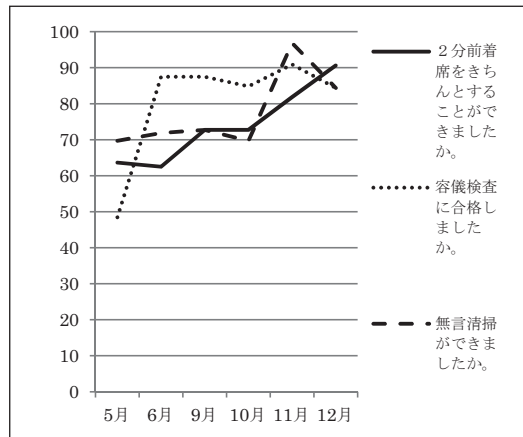


図6 生徒自身の生活に関する回答

(2) 改善の見られない回答

図7は、アンケートの中でも肯定的回答に改善が見られなかったものの推移である。

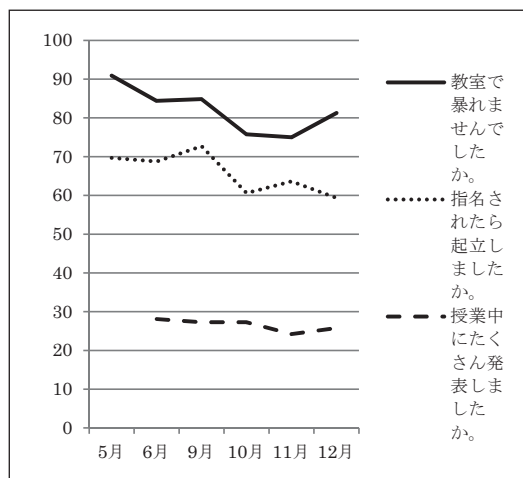


図7 改善の見られない回答

質問「授業中にたくさん発表しましたか。」の回答は20%台で推移している。これは、授業中に発表する機会が少ないことや発表への積極性が乏しいことなどが考えられる。どちらにせよ、教師の授業の工夫が求められる。教科担任制である中学校では、教科ごとの違いに戸惑いを感じる生徒も少なくない。各教科の授業で共通した実践が必要であると考えられる。このことは、質問「指名されたら起立しましたか。」の回答からも読み取れる。例えば、返事や起立、発表などの基本的な学習規律は生徒だけではなく、教師も共に意識し、互いの意見を尊重しながら改善に向けた取組が必要であると考えられる。質問「教室で暴れませんでしたか。」の回答も改善しているとは言えない。生徒の安全管理を考えると、教師の一方的な指導にとどまらずに、生徒間による指摘や係活動などで改善させることが求められる。

2. 学級での生活全般に関する生徒の評価

学級での生活全般に関して、学級の生徒にアンケート調査を実施した。項目は、学級担任に関すること、きまりを守ることにに関すること、人間関係に関することの3つである。

(1) 学級担任のリーダーシップに関すること

前述の河村(2004)の「集団のリーダーとして教師が発揮すべきリーダーシップ」の定義に基づいた質問の結果は図8である。

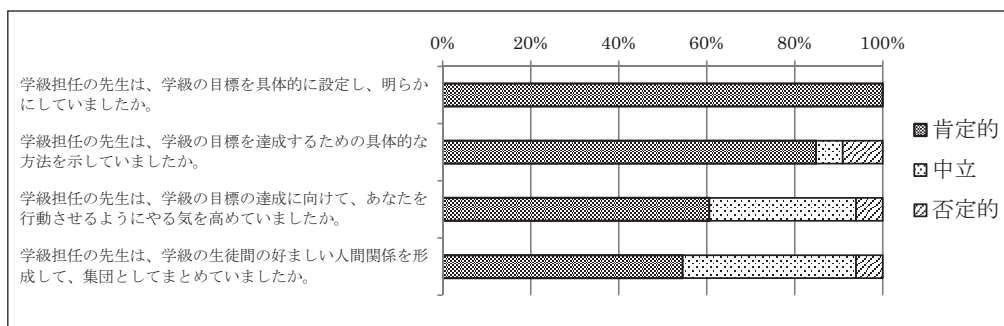


図8 学級担任のリーダーシップに関する回答

この結果から、学級担任の次のような特徴がわかる。

まず、学級目標の設定とその達成の重視である。学級目標は具体的であり、明らかになっていたと全ての生徒が回答している。これは、授業におけるワークショップ形式での話し合いや学級役員による検討、生徒全員による承認を経た目標の決定が効果的であったということを示している。また、学級掲示をすることで、常に意識することができていると考えられる。一方で、学級役員が実施していた「学級生活振り返りアンケート」は学級担任が行っているものと生徒が認識していたとも理解できる。これは、学級担任が目標達成のための具体的な方策であると生徒が理解していたと推測される。

次に、学級担任の生徒への個別の対応である。学級目標の達成に対してやる気を高めていたと肯定的に捉えている生徒は約60%である。全体に目標達成の方策を示しているものの、全員のやる気を高めていたとは言えない。全ての生徒に同じように接していても、その捉え方は生徒それぞれであるため、個々の生徒に応じた対応が必要であると考えられる。また、生徒間の好ましい人間関係を形成して、集団としてまとめていたかとの肯定的回答は約55%である。学級担任が中心になって生徒の人間関係形成に対する手立てを施したり、集団としてまとめたりしていなかったことがわかる。否定的な回答は少ないものの、中立的な回答が多いことから、学級担任の思いが十分に伝わっていないとも捉えられる。

(2) 学級担任の力量に関すること

前述の鹿島による「集団を育てる教師の力量」を参考に質問した結果は図9の通りである。

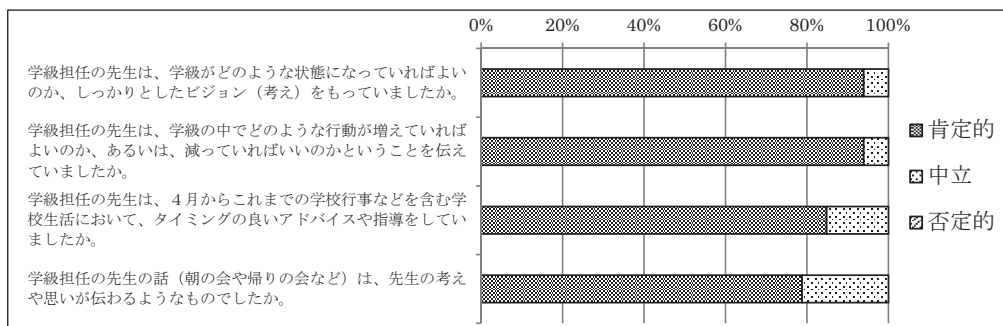


図9 学級担任の力量に関する回答

結果は、全ての質問に対して否定的な回答がなく、80%前後の肯定的回答であった。このことから、生徒が学級担任の力量を感じていたことがわかる。ただし、学級担任の話が伝わるものかどうかはわからないと回答した生徒が約20%いる。朝の会や帰りの会での話の内容が難しいものであったことや生活の実際に合わないものがあつたと考えられる。

(3) きまりを守ることに关するもの

きまりを守ることに关する質問の結果は図10の通りである。

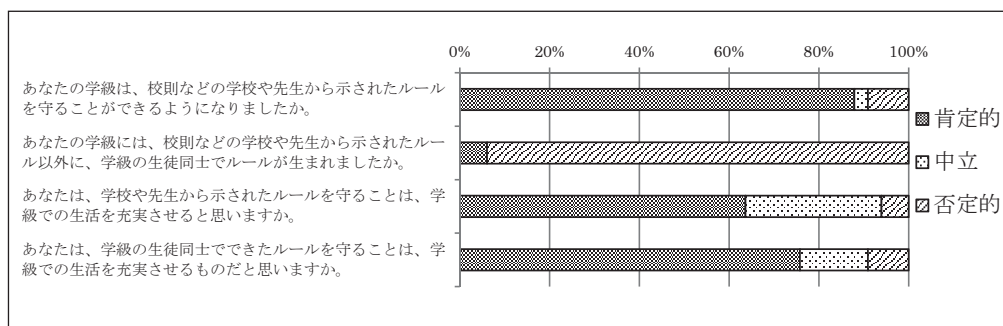


図10 きまりを守ることに关する回答

質問の結果から、80%を超える生徒が校則などのきまりを守ることができるようになったと回答している。これは、月に1回実施していた教師主導の容儀検査の効果であると考えられる。一方で、生徒は、校則などの学校や教師が示しているルールを守ることよりも生徒同士でできたルールを守ることの方が学級での生活を充実させると捉えている。しかしながら、学級において生徒同士でルールができたとの肯定的な回答は少ない。事例においては、このことを意識した実践はなされていない。このことから、生徒同士で話し合い活動などを通じて学級のルールを考えさせる場を設定するなどの工夫をすることが必要であると言える。

(4) 人間関係に関するもの

人間関係に関することに係る質問の結果は図11の通りである。

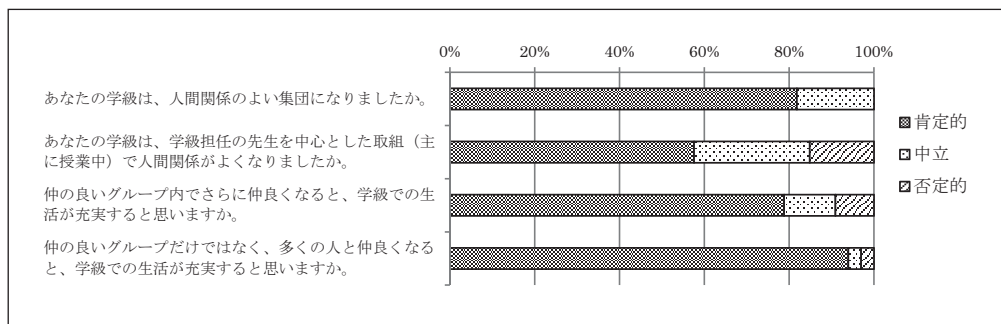


図11 人間関係に関することの回答

結果から、80%を超える生徒が人間関係のよい学級になったと答えている。これは、回答から学級担任による授業などの取組よりも生徒同士の関わりによる成果であると考えられる。ほとんどの生徒が、仲の良い人だけではなく多くの人と仲良くなると学級での生活が充実すると答えている。学級担任による取組で人間関係が良くなったと答えた生徒は58%であり、全体の51%が道徳による成果だとしている。このことから、道徳授業は学級生活を充実させる一つの手立てとして位置づいていると言える。ただし、これだけでは不十分であり、例えばSSTやSGEなどの手法を用いて学級内の人間関係をさらに広げる授業が必要であると考えられる。

(5) Q-Uにおける満足群とそれ以外の生徒の回答の相違

アンケートの結果について、Q-Uの満足群の生徒とそれ以外の生徒の回答を比較して、違いの見られた回答があった。満足群の生徒の回答は図12、満足群以外の生徒の回答は図13である。これらから次のことがわかる。

まず、「学級生活振り返りアンケート」の捉え方の違いである。満足群の生徒は70%以上が肯定的に捉えているのに対し、満足群以外の生徒は30%ほどである。このアンケートは35問前後の質問があるため、回答に時間を要する。そのためにやらされ感のある生徒もいることが推察される。満足群には、このアンケートを学級の改善に活用するために行っていると捉えている生徒が多い。このことから、アンケートの目的を生徒に十分に説明したり、アンケートの項目を精選したりするなどの工夫をすれば、アンケート調査への意識が改善され、Q-Uの満足群がさらに増加することが考えられる。また、このアンケートを学級でのルール確立にさらに活用すれば、その増加の割合も高まると考えられる。

次に人間関係に関することである。満足群以外の生徒の中には、生徒同士の人間関係がよいとは言えないと回答した生徒がいる。人間関係をよりよくするための取組がより一層必要であると言える。特に、満足群以外の生徒には、いじめや嫌がらせを感じているという生徒や人から認められるという機会が少ないと感じている生徒がいるため、これらに対する手立てを検討する必要がある。

学級担任のリーダーシップの捉え方にも違いが見られる。満足群には学級担任のリーダーシップを強く感じている生徒が多い。一方で、満足群以外の生徒はリーダーシップに否定的な

生徒が多い。学級担任のリーダーシップは様々であるが、満足群以外の生徒に対するリーダー性のより強い発揮が必要であると言える。このことは、人間関係形成に関する質問への回答と関係するものとがあると推測される。

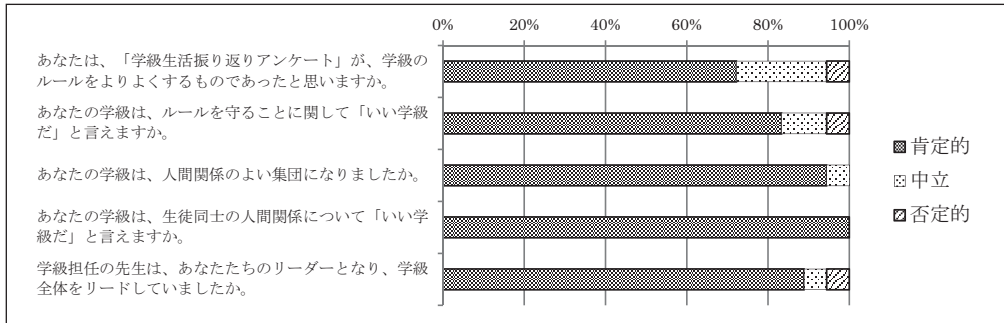


図12 Q-Uにおける満足群の生徒の回答

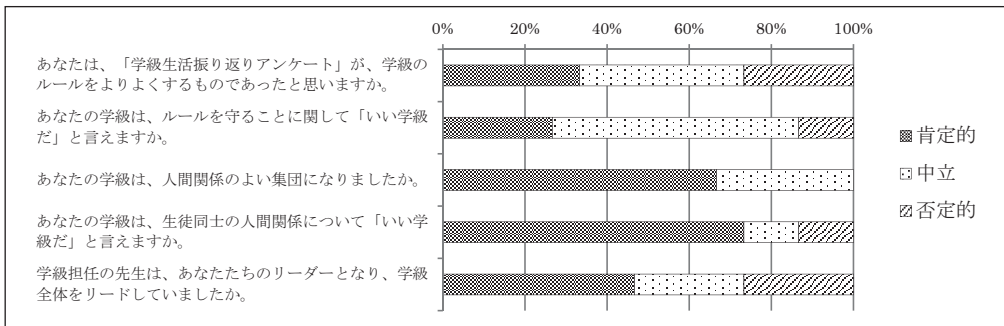


図13 Q-Uにおける満足群以外の生徒の回答

3 生徒への聞き取り

3回実施したQ-Uの結果から、数名の生徒に聞き取りを行った。その内容から、ルールの確立に関するもの、リレーションの確立に関するもの、学級担任に関するものに分けて整理する。

(1) ルールの確立における特徴

ルールの確立に関する回答は次の通りである（下線は筆者による）。

「高校に向けて守らないといけないなって思いました。」（女子生徒D、不満足群→満足群）

「シャツが出てることが多かったから、自分が出ていたらちょっと言っと友達に言ったら、注意してくれるようになって、それで、常にシャツがちゃんとなっているようになりました。」（男子生徒E、侵認知群→満足群）

（男子生徒E、侵認知群→満足群）

「自分がしゃべっている人に注意したりとか、自分がしゃべっていたら近くの人が注意してくれたりとかして、私語をだんだんなくしてきている」（男子生徒F、不満足群→満足群）

これらのことから、ルールの確立に関しては、高校入試が影響していることがわかる。また、教師による一方的な指導だけではなく、生徒同士のやりとりの中で互いに注意しあうようになっていることも理解できる。このことから、ルールの確立には人間関係を充実させる必要がある。

(2) リレーションの確立における特徴

リレーションの確立においては、人間関係を良くするきっかけに関する答えが多く見られた。

「きっかけ…授業中とか…です。しゃべりかけられたりして…。」(女子生徒、不満足群→満足群)

「自分の意見が友達の誰に一番近いかで、一番の意見の近い人について行く感じだから。自分自身の意見をもつ、自分の意見がクラスのものになることはないけど、自分の意見と一番近いと思った友達がクラスの意見になるようなことはあったりします。」(男子生徒、侵認知群→満足群)

「あいさつ運動があってから笑顔で先生とか普通に笑顔であいさつできるようになりました。」(男子生徒、不満足群→満足群)

授業中における些細なやりとりや係活動などでの取組など、学校生活においては人間関係を良くするきっかけは様々にあることがわかる。また、自分の意見を持ちにくい生徒が意見を求められた時、話し合いの中で似た意見の生徒を見つけることもある。学級においては、話し合い活動や係活動の活性化などで、人間関係を改善することができると言える。

(3) 学級担任に関する特徴

学級担任に関する質問については、次のような回答が見られた。

「他の先生は、学級担任の先生みたいにズバツとなんかはっきりしてなくて、曖昧だったのでいいなと思いました。」(女子生徒、不満足群→満足群)

「先生がいなかった時に、クラスが乱れている？まともじゃなかったりしたから、友達とやっば先生がいないとこのクラスってだめやなって。」(男子生徒、侵認知群→満足群)

「いろんなところをアドバイスしてくれる感じで、反れた方向に行っているとそこを戻してくれる感じだったので、いい先生です。」(男子生徒、不満足群→満足群)

学級担任は、物事を曖昧にせずにはっきりと伝えて、物事をよりよくするためのアドバイスをしながら集団をまとめようとしていることがわかる。

Ⅳ 研究のまとめ

本研究では、中学校における集団生活の充実に向けた学級経営の在り方について、Q-Uの結果と実践内容を整理して、生徒へのアンケート調査や聞き取りを通して検討した。これらを通して明らかになったことは、次の通りである。

まず、朝の会や帰りの会、学級活動や道徳の授業などの学級担任が生徒と関わることで、時間を重視することで、Q-Uにおける満足群は増加し、結果として集団生活が充実するということである。事例では、学級活動における学級目標の設定を工夫したり、道徳の授業を充実させたりすることで、満足群が増加したと考えられる。

また、生徒主体による定期的な振り返りも大きく影響している。「学級生活振り返りアンケート」では、全ての結果が改善した訳ではないが、このアンケートを継続的に行うことで、学級におけるその時点での課題が明確になり、その対策が意識される。このことで、学級生活が悪化することなく、充実したものに保たれていたとも考えられる。

ルールの確立に関しては、教師によるものと生徒によるものの両方が必要であると言える。事例では容儀検査などの教師主導の取組が生徒の規範意識を高めていた。一方で、生徒は、生徒同士でルールを生み出すことが必要であるとの意識はあるものの、実際には生み出すことが困難である様子がうかがえる。このことから、教師の取組を生徒会などに移譲したり、生徒に教師が意図的な助言を行うことで生徒間のルールを検討させたりするなどの工夫が必要である。学級生活を充実させるために、教師と生徒がルールを共有することが重要であると考えられる。

リレーションの確立には日常の教育実践が重要である。学級生活の充実のためには単に実践するだけではなく、全ての生徒に熟考させる機会を与えるなどの工夫も必要である。事例では道徳の授業を充実させた。このことだけではなく、授業においてペアやグループなどの話し合いを取り入れるなどの工夫をすることが重要である。また、生徒の学級生活の中には、リレーションを確立させる些細なきっかけがある。これを授業の題材にすることも人間関係をよりよくすると考えられる。

Q-Uによるアセスメントにより学級経営を進める中では、ルールとリレーションの両方の確立を意識しなければならない。それらを確立させるために、学級担任はリーダーシップや力量を発揮する必要がある。そのことを前提として、学級担任と生徒の協働によるルールとリレーションの確立に向けた実践がなされることで、学級での生活は充実されるものであると考えられる。

なお、本研究はあくまでも単一事例の研究であるため、他の事例との比較が必要である。今後は、他の教員とも連携を図りながら、集団生活を充実させるための実践を進めたい。

引用・参考文献

- 河村茂雄・小野寺正己・粕谷貴志・武蔵由佳（2004）「Q-Uによる学級経営スーパーバイズ・ガイド」
図書文化社
- 河村茂雄・粕谷貴志・鹿嶋真弓・小野寺正己（2008）『Q-U式学級づくり 中学校－脱・中1ギャップ「満足型学級」育成の12か月』図書文化社
- 河村茂雄（2010）『日本の学級集団と学級経営』図書文化社
- 田中博之編著（2013）「学級力向上プロジェクト 「こんなクラスにしたい！」を子どもが実現する方法
小・中学校編 DVD付」金子書房